

「けやき俳句の会」会報(第二十五回)

会員互選句

令和三年七月七日

第二百十五句会記録

★日時 令和三年八月四日

★場所 千葉中央コミュニティセンター

★参加者十四名 (総数六十三句)

★真樹先生投句 (○内の数字は得票数)

③炎暑続く自粛の鬱の重きこと

②旅土産仏間に置いて紗を脱げり

②夏霧深し此の先にある未来

★真樹先生選句 (○は特選)

◎⑧土用干や母の匂いの若きこと

◎①青蜥蜴キヨロリ旧友に会ふごとく

◎①猫看取る早朝蟬の鳴き初む

⑥紺暖簾の白字鮮やか鰻重

⑥風鈴のだんだん遠くうたた寝す

④日毎瘦せ香の高くなる梅を干す

③釣竿の数本ひかる夏の川

②梅雨夕焼あしたを映す水溜り

②庭隅の葉陰真白き茗荷の子

②みんなの機嫌上々浜風も

②柘榴の花艶やかさ増す雨に濡れ

①梔子の白郷愁も錆はじめ

①朝食はメロンを冷やし贅沢に

①合歓の花木陰に憩ふ軽鴨ら

①墓参り川面のスカイツリー揺れ

①テレビから庭の木々から蟬の声

④棘つよしふるさとの茄子やわらかし

③意気軒昂満で米寿の終戦日

③大夕立火山灰降る町を濯ぐかに

③幾年や廃墟に咲きし百日紅

③アクリル板挟み手酌の冷酒注ぐ

②夕映えの消えゆく先に夏の月

②甚平に気取りの煙草吹かしけり

②空蟬や風と生き抜く夢の跡

②盛衰の影を残すや桐の花

②少年の自転車飛ばす夕立かな

②もてあます煩惱数多蟬時雨

①椋鳥の万羽の壻大合唱

①逞しき足のギブスや夏座敷

①さみだれや落ちて穴ほる滴かな

①十国を照らす峠の蛍の灯

①極暑日に蟬空から落ちてくる

①一汗の息つく後の甘酒や

①水面翔け曳行空へ夏燕

①柴犬の舌長々と大暑かな

①西日さす踏台のある厨かな

①朝顔の蔓余りをり風に揺れ

藍愛

蕉哉

隼人

廣川

渡辺

香魚

隼人

樹音

東洋

清明

渡辺

紀泉

紀泉

而今

夢城

誠

誠

真弓

冬水

東洋

鳴石

【次回開催】

令和三年九月一日

三句提出